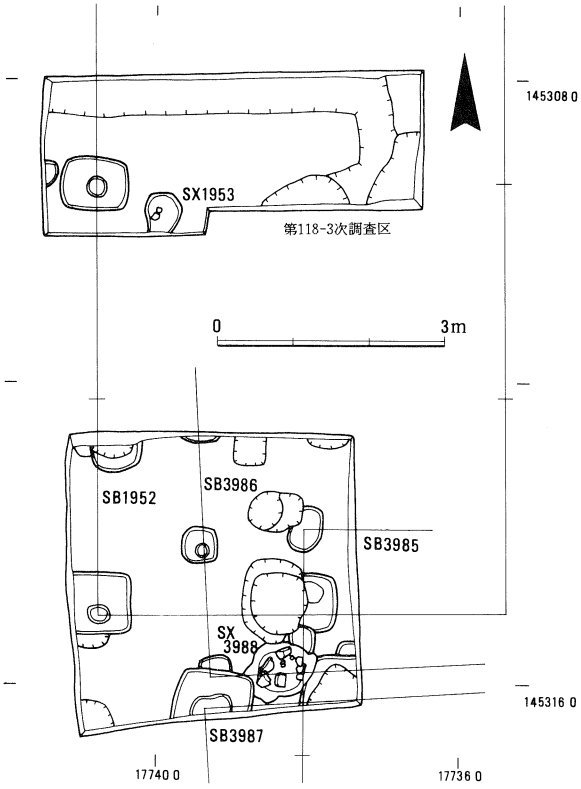
1　法華寺旧境内の調査Ⅰ　第174－1次

民家増築に伴う事前調査。調査地は法華寺旧境内の北西部にあたり、昭和54年度に行った第118－3次調査と同一敷地内の調査である。調査地の周辺は後世に大きく削平されており、地表下0.2mで地山の白色粘質土層に達する。この地山上面で4時期にわたる掘立柱建物を検出したが、すべて部分的な検出にとどまる。SB1952は両次の調査区にまたがって存在する桁行3間以上の南北棟建物。柱掘形は一辺0.8mの方形で、径0.25mの柱痕跡が遺存する。桁行柱間は9.5尺、梁行柱間は9尺である。SB3985は柱間5尺の小規模な建物。SB1952よりも新しく、一間分を検出したにとどまる。SB3986は6尺等間の建物で、南側柱列はSB3987の柱穴と重複する。一辺0.45mの掘形中に径0.2mの柱痕跡が認められる。SB3987は一辺が1mを越える大形の柱掘形をもつのに対して柱間は7尺前後と狭く、柱抜き取り穴を伴う。これらの掘立柱建物よりも新しい遺溝に、浅く不整形な掘形内に人頭大の河原石を裾えたSX3988・1953がある。礎石の据付掘形風の遺溝であるが、ともに単独出土のため性格は不明。また調査区内には近現代の土壙・溝が多数存在する。

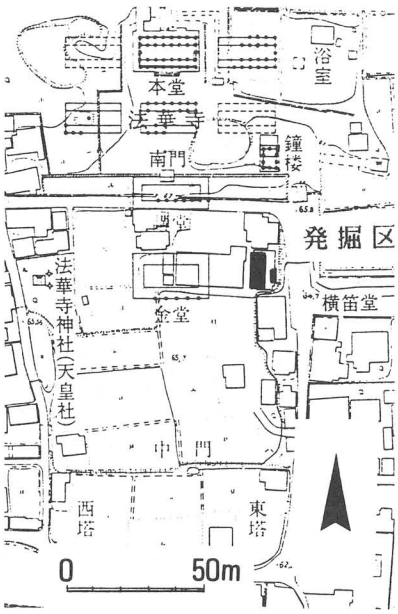


第48図　法華寺旧境内発掘遺構図

以上のように調査面積が狭少であったにもかかわらず、かなりの密度で遺溝が存在することが明らかになった。個々の建物の時期は明確にしがたいが、法華寺の付属雑舎群を構成する建物の一部である可能性が高く、周辺部における調査の進展が期待される。

2　法華寺旧境内の調査Ⅱ　第174－22次

本調査は法華寺町公民館改築に伴う事前調査である。調査地は現在の法華寺南門の東南約50mの所で、鐘楼の真南である。南門の南では、これまでに第82－6次（昭和49年度）・第98－21次調査（昭和52年度）が行なわれており、その結果奈良時代の法華寺金堂跡が確認されている。今回の発掘区はその真東にあたり、金堂に取り付く軒廊もしくは北面東回廊の存在が予想された。さらには法華寺造営に先行する藤原不比等邸・皇后宮の遺構の確認が期待された。調査の結果、奈良時代の法華寺造営に伴う遺構と、造営前に遡る遺構を確認した。



第49図　法華寺旧境内調査位置図

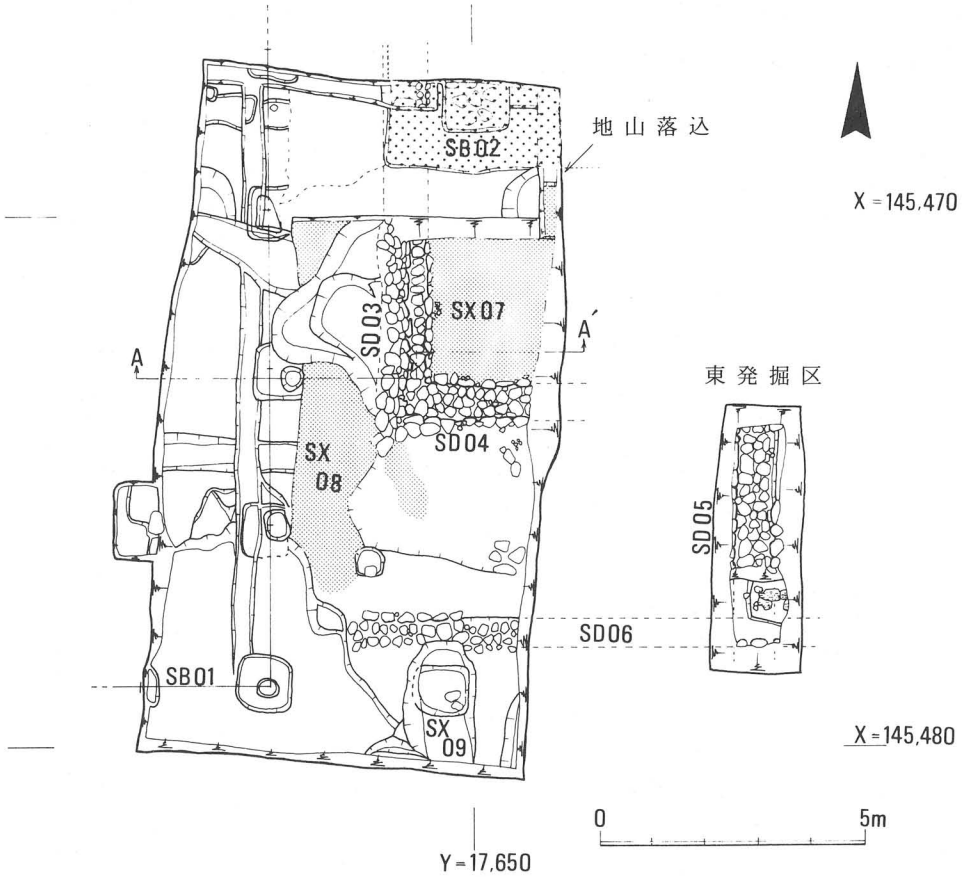
法華寺造営前の遺構　検出した遺構は井戸周囲の排水施設である南北溝SD03・東西溝SD04、礫敷SX07・SX08と掘立柱建物SB01である。

発掘区の東北部にある礫敷SX07は、地山を周囲より約1m掘り下げた面にある。その段差には人頭大の河原石を3～4段積み上げ、石積の擁壁としている。SX07の周囲には石積擁壁に沿って、石組の南北溝SD03と東西溝SD04がめぐる。SD03とSD04の内法幅はそれぞれ30cmと60cmである。それぞれの溝のSX07側には高さ約10cmの細長い石を並べ溝側石とし、溝底には偏平な石を敷く。石積擁壁の西側には石積の上端から約1.5m幅で礫が南北に敷かれる（SX08）。そして石積擁壁の南側は、なだらかに東北に向って下がっており、所々礫敷の跡が見られたが、その範囲は確定できなかった。発掘区東北隅での断ち割り調査により、井戸跡と考えられる地山の落ちを確認し、発掘区の東北に井戸本体を推定した。よって、これらの遺構は井戸に伴う一連の施設と判明した。また東発掘区ではSD03・SD04から水を南へ流す南北溝SD05を検出した。SD05は内法幅60cmで

底に偏平な石を敷き、東側には人頭大の石を、西側には低く細長い石を並べる。

SX08の西には礫敷に沿い掘立柱建物SB01が建つ。桁行４間以上で、10尺等間の南北棟である。梁間は東１間を確認したのみで柱間は８尺である。また発掘区東南隅にも掘立柱柱穴（SX09）がある。この柱穴はSB01の南妻東延長上にあり、SB01東南隅柱との間隔は11尺である。これはSB01に取り付く塀もしくは別の建物の西北隅柱の可能性が考えられる。

以上の遺構を埋めた法華寺造営に伴う整地土（以下、単に「整地土」と略す）から、最も新しい遺物として奈良時代中期の瓦が出土しており、遺構の廃絶は法華寺造営時と思われる。しかし遺構本体から遺物は出土しておらず、これら一連の遺構の造営が藤原不比等邸の時期まで遡るかどうかは決定できなかった。



第50図　法華寺旧境内発掘遺構図

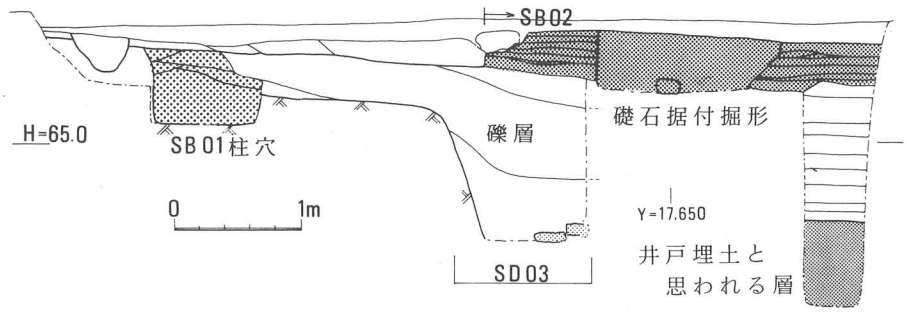
法華寺造営に伴う遺構　礎石建物SB02と東西溝SD06を検出した。これらは法華寺造営前の遺構（以下「下層遺構」と呼ぶ）を埋めた後に造られている。

SB02は基壇建物であり、検出した基壇の範囲は東西３ｍ南北1.5ｍである。基壇は版築により築成され、茶灰色粘土と淡黄灰褐粘土とを５cm程度の厚さで互層に積んでおり、残存している版築層の厚さは約40cmである。また版築直下に厚く礫を敷いている。これは下層遺構埋立ての際に版築下の地固めのために敷いたものと思われる。なお雨落溝・基壇化粧の痕跡は検出していない。建物は礎石建ちで、西南隅柱跡１カ所を検出した。礎石据付け掘形は方1.2ｍで、底に人頭大の石を数個敷き根石としている。

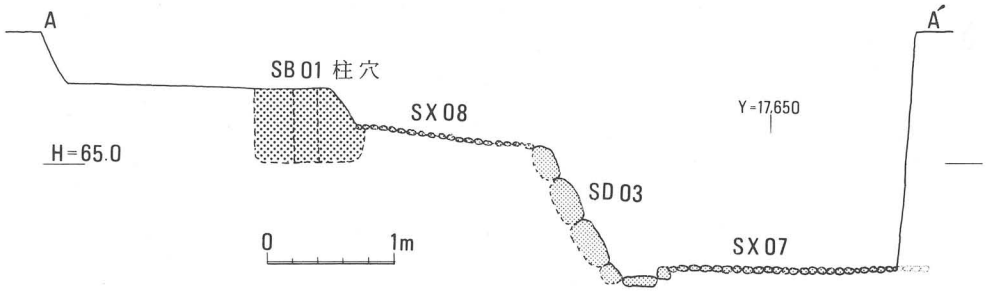
SD06は石組による東西溝である。内法幅約40cmで、底には偏平な河原石を敷き、側面は石を並べ側石としている。位置的に金堂に取り付く回廊の雨落溝と考えられるが、回廊基壇・柱跡を検出していないので、SD06が回廊の南北どちら側の雨落溝となるかは決定できなかった。もしSD06が回廊南雨落溝とすると、回廊は雨落溝心々幅5.2ｍで金堂中央に取り付くことになり、北雨落溝とすると、回廊は金堂南廂に取り付くと考えられる。

電気探査　発掘調査によりSD03を南北6.5ｍ、SD04を東西３ｍ分検出したが、SD03は発掘区の北方で東に曲がり井戸を囲むものと予想された。その位置を推定するために発掘区北側で、東西方向２本、南北方向１本の測線を設け、電気探査二極法により石組溝の探査を行なった。その結果が第53図に示すもので石組溝位置は比抵抗の大きい部分としてとらえられている。それぞれの図中のＡとした個所がそれにあたる。その結果SD03はSD04から北方16ｍの所で東に曲がることが確認できたのである。また井戸の東にも同様な溝が巡っていると考えられたが、現在アスファルト道路下のため探査できなかった。

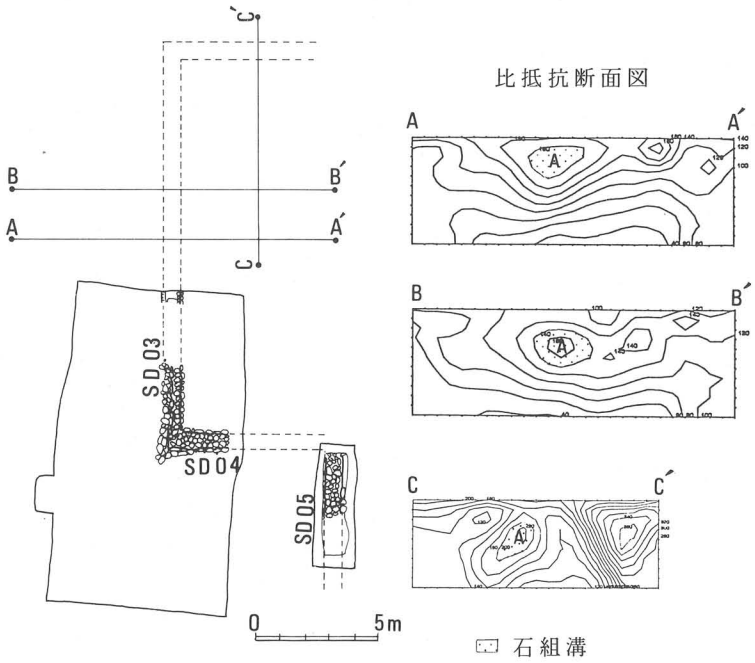
よって石組溝によって囲まれる範囲は南北16ｍである。そして東西幅は、SD05を井戸東の溝の延長とすると７ｍ、SD05が中軸線上にくるものとして14ｍとなる。第78次調査によって発掘された平城宮内の石敷井戸（SE7900）の規模が東西8.3ｍ南北14.5ｍであるから、今回発掘されたものは特に立派なものといえる。



第51図　発掘区北壁土層図

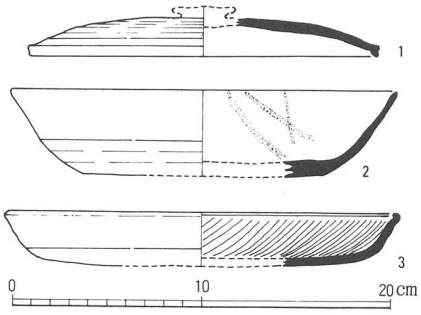


第52図　A－A′断面図

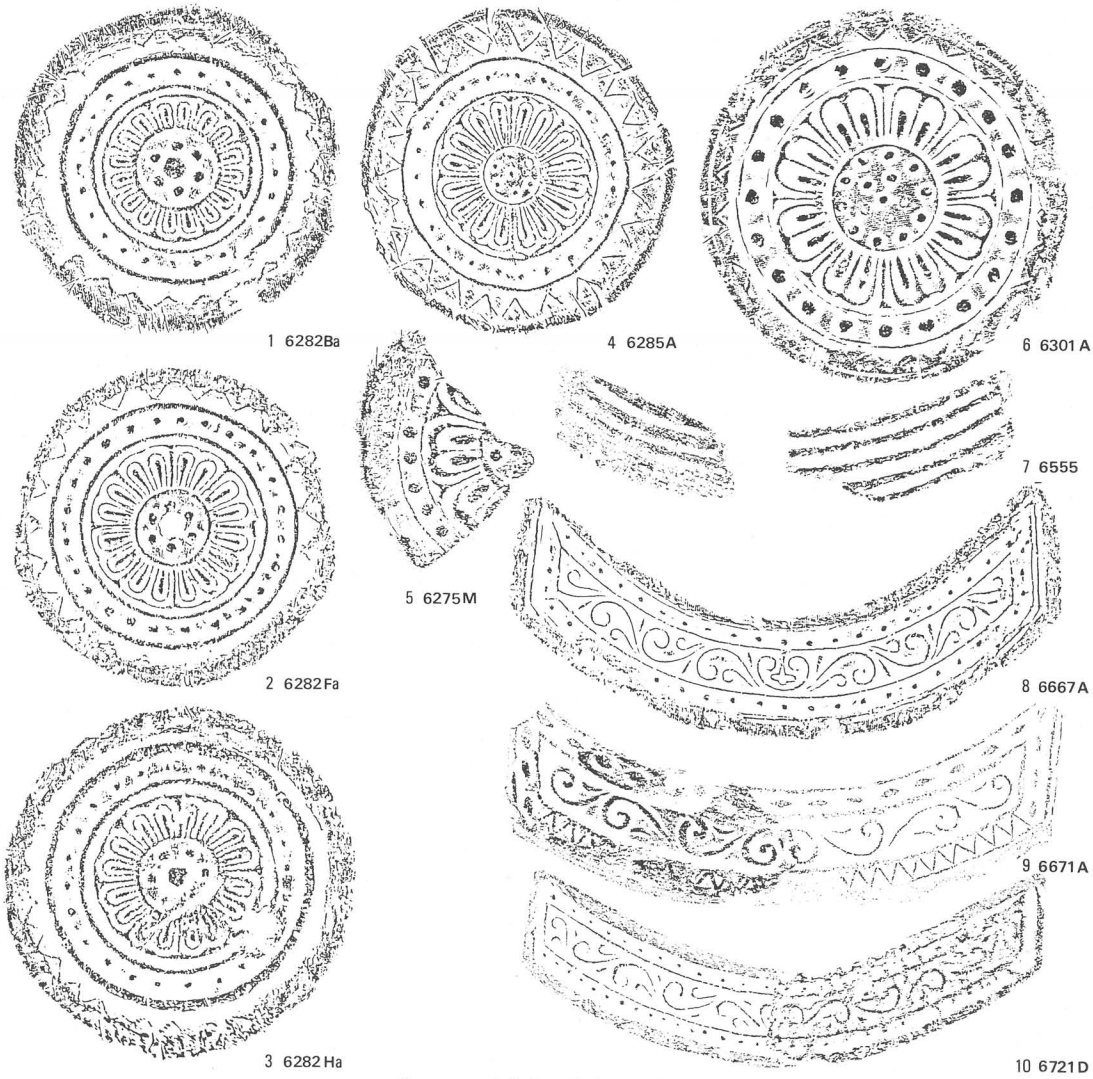


第53図　電気探査成果

遺物　瓦は整理箱に60箱分出土し、軒瓦は74点、内訳は重弧文軒平瓦５点、平城宮出土軒瓦編年Ⅰ期が１点、Ⅱ期が44点、Ⅲ期が８点、平安以降が16点である。最も多く出土したのは6285Aと6667A（Ⅱ期）の組合せである。土器は整地土から平城宮土器Ⅱの須恵器杯Ａ(2)、杯蓋(1)、土師器Ⅲ(3)が出土した。



第54図　整地土出土の土器（１：４）



第55図　法華寺旧境内出土軒瓦（１：４）

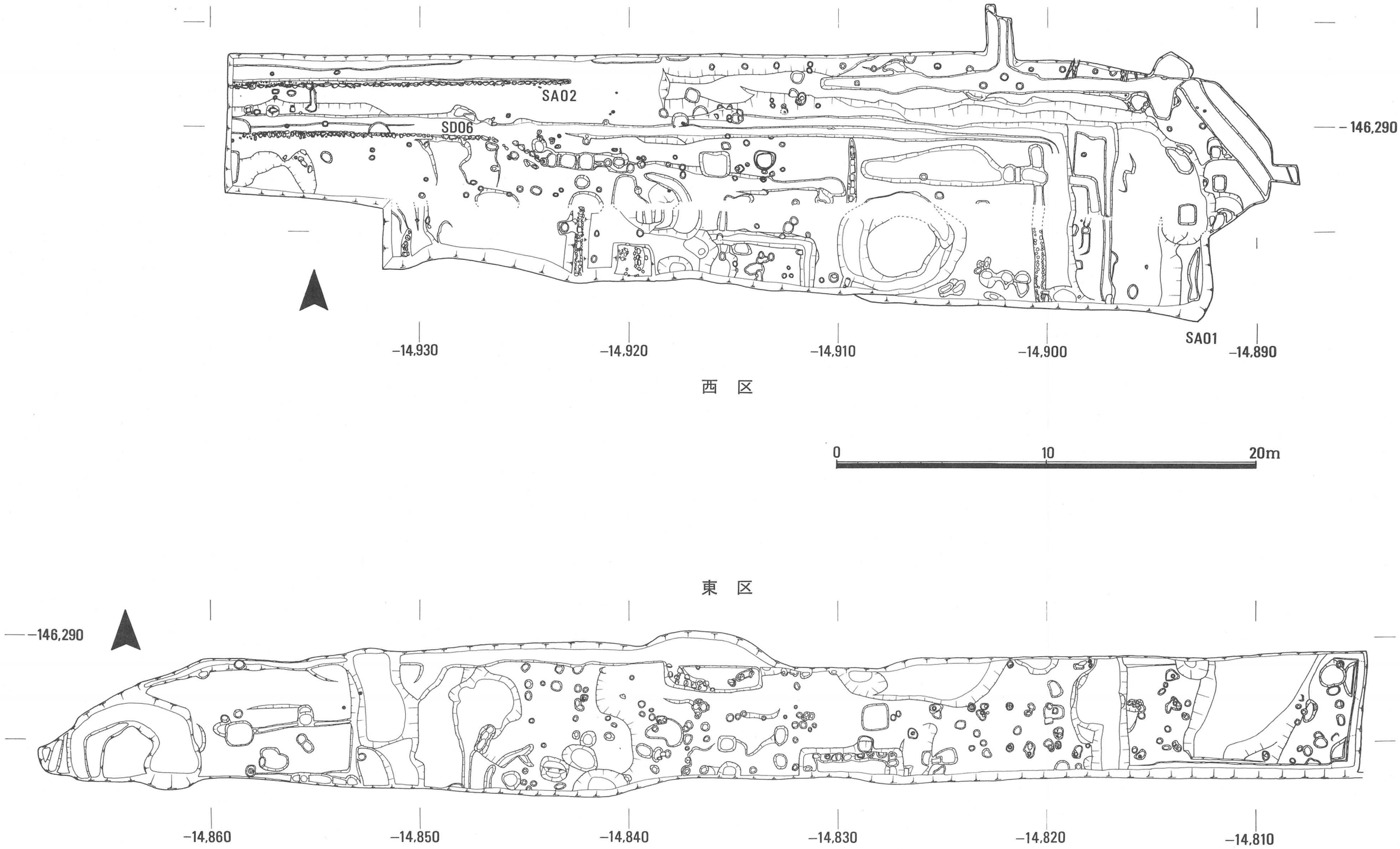
3　興福寺旧境内の調査　　第174－7次

奈良県庁前の交差点に地下道を建設するための事前調査である。天理街道を挾んで東区と西区に分けて調査をおこなった。

西区　興福寺旧境内の東辺部にあたるところで、発掘区の土層は、上から道路鋪装の整地土（現代）、黄褐粘質土、暗黄褐砂質土（整地Ａ）、黒灰砂質土（整地Ｂ）、地山（赤黄褐粘質土）となる。整地Ａには室町時代の灯明皿を多数含む。整地Ｂには鎌倉時代前期の瓦器等を多数含んでいる。検出した主な遺構は、興福寺東辺築地SA01、興福寺境内の東西築地SA02、SA02の側溝SD06等である。SA01は地山を削り出した南北築地の基底部で、全幅は確認できないが３ｍ以上ある。SA02は西区東北隅でSA01に連らなる東西築地である。この北側は興福寺旧境内の中央を東西に走る通路で、発掘区の北側に東面中門が存在する場所にあたる。SA02も地山を削り出して基底部を造り出している。これも全幅は確認できず、３ｍ以上ある。SA02は西へゆくにつれ地山が低くなるため、黄褐色の土を積んでいる。この積土は整地Ｂの下に入りこんでおり鎌倉時代以前、おそらくは奈良時代まで遡りうるものと推定される。SD06はSA02の南側溝で、南側に玉石護岸が残る。この溝は概略２層に分かれ、上層は東西にまっすぐのび、下層は、発掘区中程で南へ折れ曲る。石の護岸は下層の時期のものである。

東区　興福寺旧境内をはずれた東側である。土層はおおむね西区と同様で、中世から近世に至る多量の土器片の混る土で整地が行なわれている。発掘区西側３分の１程には顕著な遺構がなく、東側３分の２には多数の小穴や土壙・溝等がある。発掘区西側３分の１が奈良時代の東京極大路であったと推定され、そのために建物等の遺構が少ないと思われる。

西区は近世の絵図では戒壇院と称する子院にあたる。東区東側も同様子院があったと推定される。



第56図　興福寺旧境内発掘遺構図（1：200）

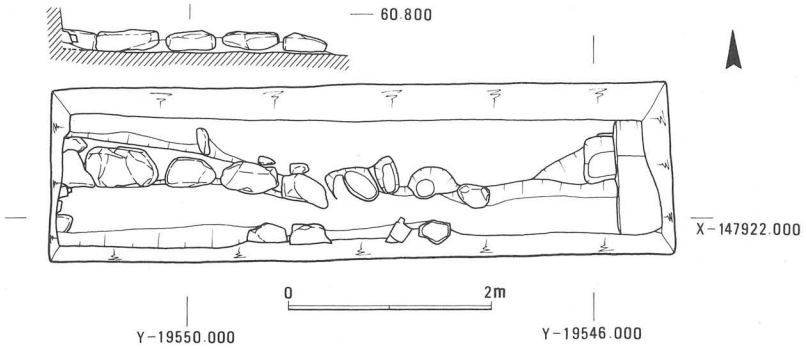
4　薬師寺旧境内の調査　　第174―13次

本調査は住宅建設に伴なう事前調査で、調査地は薬師寺西僧房の北に接する。

調査地は全体に盛土（厚さ50cm）があり、以下、水田耕土、床土、灰褐砂質土、灰褐粘質土、黒色砂質土（焼土層）、黄灰粘質土、黄灰砂質土、黄白粘土となる。

検出した遺構は、東西溝と土壙の一部である。東西溝は両岸に石を並べて護岸としたもので、幅約30cm、深さ約20cm。東で南に振れており、さらに蛇行でもするのであろうか、発掘区東端付近では検出できなかった。護岸の石は、発掘区西半の北岸でよく残っている。長さ40～60cm、幅30～40cm、厚さ20cmほどの石を一列に並べ、石の裏込めや空隙に粘質土を充塡している。当初は、裏込めに石を用いて安定をはかっていたと推定される部分もある。発掘区中央付近の北岸では、石の抜き取り痕跡が認められた。一方、南岸は発掘区南辺と重なり、３個所で石を検出したにとどまる。また、発掘区東端と中央付近で、下層の素掘りの東西溝を検出した。幅１ｍほど、深さ30cm前後と推定される。この素掘り溝を改修して石溝としたのであろうか。石溝を覆う焼土層の上面では、幅40～50cm、深さ10cmほどの素掘りの東西溝を検出している。土壙は石溝の裏込め土を切り込んで掘られており、埋土からは焼土と多量の瓦片が出土した。現状での深さは40cmほどであるが、中心部に向かって、さらに深くなると推定される。

遺物の大半は瓦で、石の抜き取り痕跡や焼土層からは、鎌倉時代の巴文軒丸瓦が、下層溝からは薬師寺所用軒丸瓦6641Ｇ型式が鎌倉時代の瓦と共に出土した。



第57図　薬師寺旧境内発掘遺構図

5　西大寺境内の調査　（次数外）

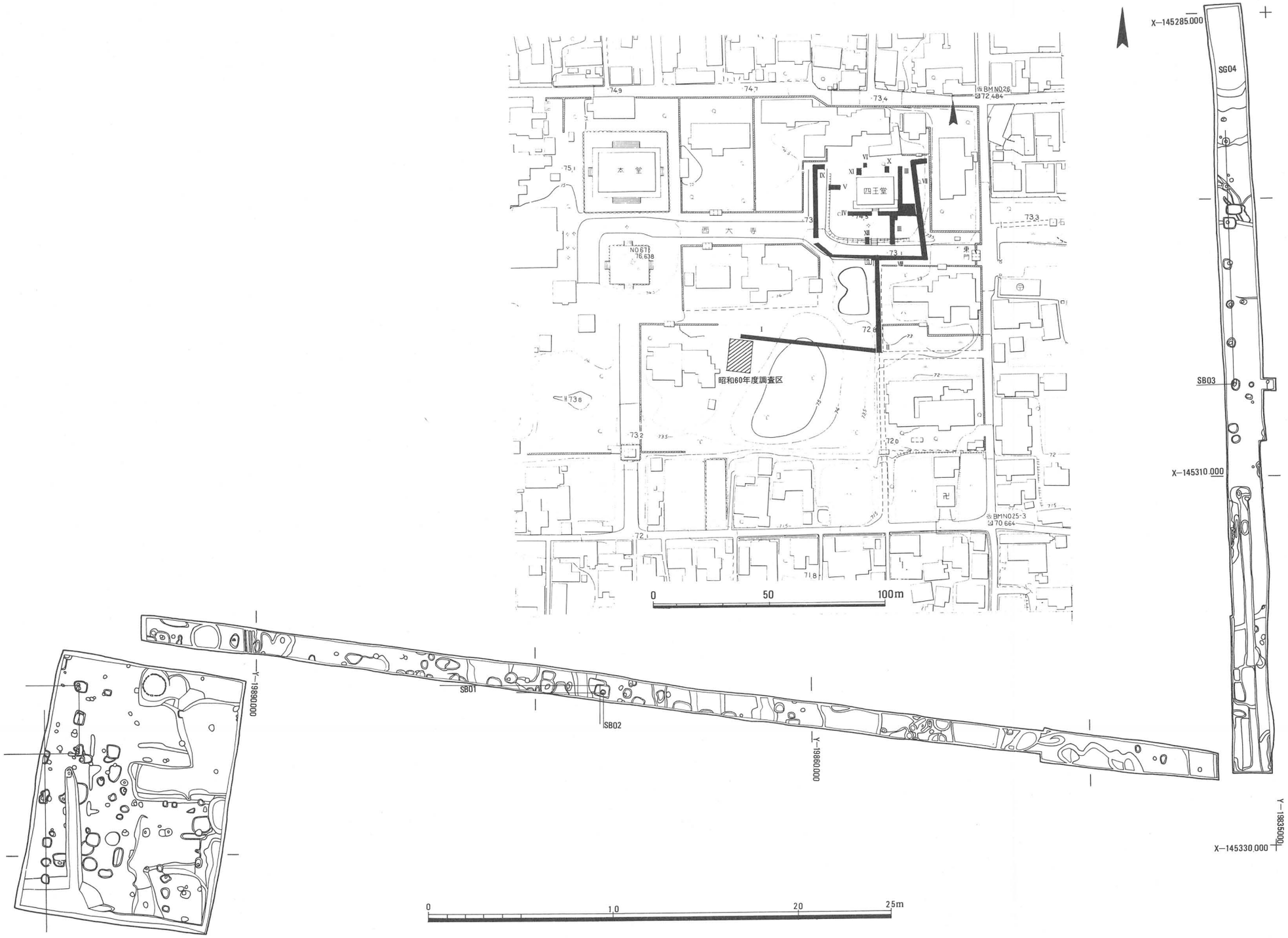
本年度の防災工事は、四王堂を対象としたもので、貯水槽から四王堂に至る区間と堂周辺の配管予定地について調査を行った。また四王堂周辺の配管位置を決定するために、現四王堂基壇にトレンチを入れ、本来の基壇規模を確認する調査も合せて行った（第58図参照）。防災工事関連調査報告書は、工事最終年度の刊行予定であるので、ここでは各区の調査成果の概要を簡単に述べるにとどめたい。

Ⅰ区

護国院の東にある駐車場に設けた、東西58m、南北1.5mの東西トレンチ。旧表土下は茶灰褐粘質土・黒褐粘質土の整地土で中世の遺物を含む。この整地面で中世以降の大小の土壙、溝を検出した。整地土下は、部分的に旧流路と見られる砂の堆積があるが、基本的には黄灰色粘土の地山となり、この面でも古代～中世の遺構を検出した。奈良時代の遺構としては、掘立柱建物２棟分を検出したが、調査区が狭いため棟方向は分らない。SB01は柱間９尺（2.7m）等間で東西方向に３間分検出した。SB02はSB01を切る建物で１間分を検出したにとどまる。SB01は昨年貯水槽予定地で検出した掘立柱の東西棟建物と柱筋を揃え、西大寺造営以前の右京一条三坊六坪の宅地に属す建物と考えられる。

Ⅱ区

駐車場から四王堂に向う参道に設けた、東西1.5m、南北41mのトレンチ。表土は近世の瓦を含む路面敷であり、その下に厚さ約0.5mの暗黄褐砂質土があり、地山に至る。Ⅰ区に較べ遺構密度は薄く、すべて地山面で検出した。主な遺構としては、北端で検出した中世の池SG04と奈良時代の掘立柱建物SB03がある。SG04は後述するⅧ区でもその延長部分を検出してるので詳細はその項で述べる。SB03は柱間７尺（2.1m）等間で南北に６間分検出した。南端の柱穴の東側に発掘区を拡張したが、その続きは検出されず、恐らく西側に延びる南北棟であろう。柱掘形等から遺物は何等出土しなかったが、四王堂との位置関係から判断すると、やはり西大寺造営以前の建物と目されよう。



第58図　西大寺境内発掘位置図（１：2000）およびⅠ・Ⅱ区発掘遺構図（１：250）

Ⅷ区

現東門から西に向かう参道に設定した東西51m、南北1.5mの東西トレンチ。Ⅶ区は、ほぼ全域にわたってⅡ区で検出した池SG04の広がりであるが、西端付近で池の北岸の一部を確認している。またこの岸の近辺では井戸SE05を検出した。SG04は深さ約1.0m、層序は底から黒灰粘質土（堆積土）・黄褐土（埋立土）・暗黄褐砂質土の順で表土に至る。堆積土には比較的遺物は少なく、土師器・須恵器・三彩陶器・瓦器の他、塑像片・泥塔・建築部材等が少量出土している。堆積土には13世紀後葉と目される土師器小皿・瓦器があり、また埋立土からは14世紀頃と考えられる軒丸瓦が出土しており、池の廃絶時期の手掛となる。井戸SE05は一辺約1.0mの方形の横板組で各辺4段分が残っていた。掘形の規模は分らないが、その埋土には瓦や凝灰岩が混る。井戸枠内の上層堆積には多量の瓦を含み、井戸底からは10世紀前半頃の土師器・灰釉陶器等が出土した（第61図参照）。

Ⅶ区

四王堂の東、法寿院に向う道路に設定した東西1.5m、南北45mの南北トレンチ。路面敷直下が暗茶褐粘土の地山であり、地山がくぼんだ部分に黄褐粘土の整地土が残る。検出した主な遺構は、Ⅱ・Ⅷ区検出のSG04の北岸の一部、中世の大土壙SK08、奈良時代の掘立柱の東西棟建物2棟などである。

SB07は約9尺（2.7m）で梁間2間の身舎の南北両面に廂が付く。SB06は梁間2間、柱間6尺（1.8m）の東西棟でSB07から12mの間隔を保ち、それと柱筋を揃える。SB07の柱痕跡から西大寺創建軒丸瓦6236Aが出土している。

またSB07は、西大寺資財帳の四王院の項にみえる東北檜皮葺房の規模（梁間寸法）が一致し、同じくSB06も檜皮小屋の梁間寸法に近く、四王院の付属棟と考えてよかろう。

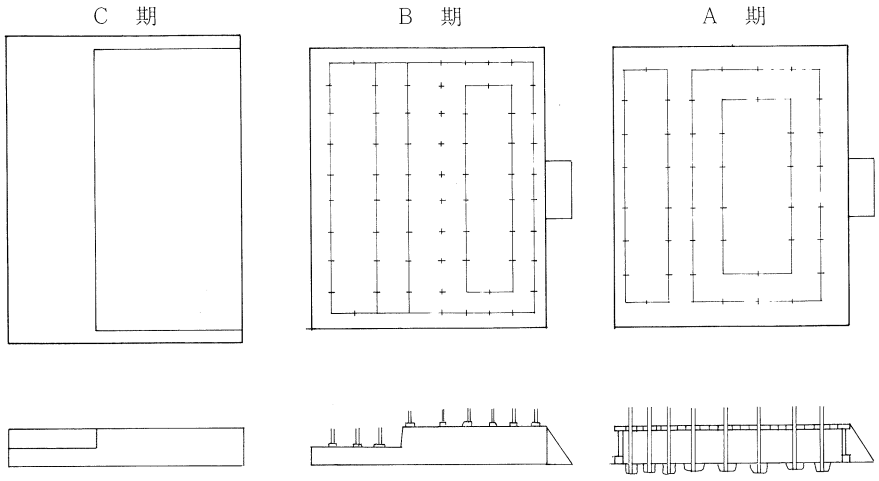
Ⅸ区

四王堂の西、幼稚園に向う道路に設定した東西1.5m、南北29mの南トレンチ。道路敷下には、焼土や焼けた瓦を含む整地層があり、その上面及び下面の地山面で柱穴や大小の土壙、池状遺構を検出した。その多くは近世の遺構である。

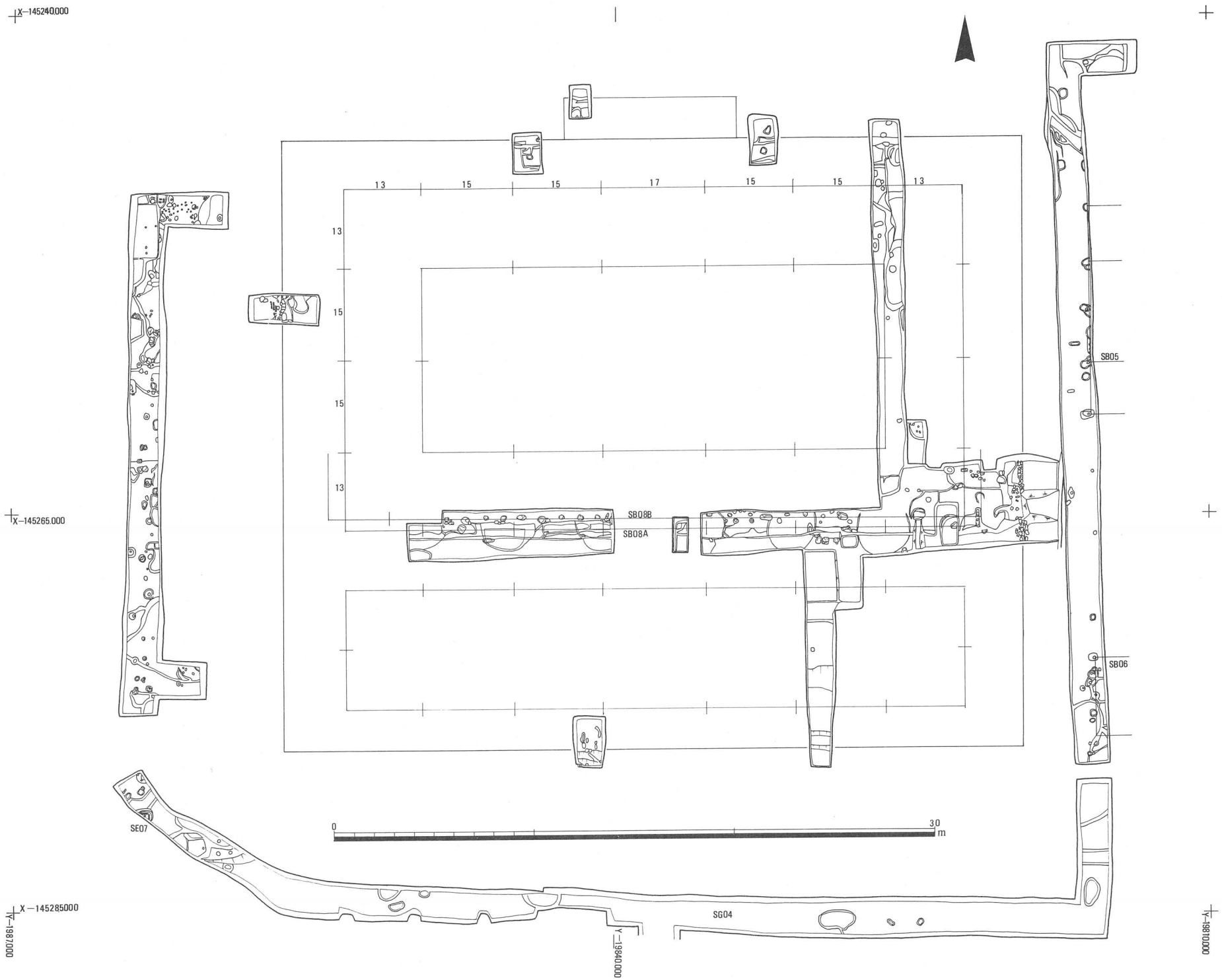
四王堂基壇の調査（Ⅲ～Ⅵ・Ⅹ～Ⅻ区）

現四王堂の軒下に接して南北、東西の両トレンチ（Ⅲ・Ⅳ区）を、北面・南面・西面には、Ⅴ・Ⅵ・Ⅹ～Ⅻの各小トレンチを設定し、基壇規模の確認調査を行った。その結果、当初の基壇規模を確認し、基壇と四王堂の変遷に関する重要な知見をえた。基壇とそれに伴う建物は大きく３時期の変遷をたどる（第59図）。

Ａ期　創建期の四王堂の時期にあたる。基壇は凝灰岩を使った壇上積で、規模は南北約31m、東西37m。基壇は地土の上に厚さ0.3m程の整地をしたのち版築によって築く。柱はすべて基壇上面から大きく抜取られ、二ケ所断割ったが、掘形は残っていなかった。柱抜取穴は版築下の整地土をも深く掘込んでいることから、当初の四王堂は基壇を伴う掘立柱建物であり、柱穴は整地した後に掘り、柱を立てた後に版築で基壇を築いたことがわかる。また資財帳によれば、四王堂は桧皮葺の双堂（ならびどう）形式の建物であったことが知られるが、Ⅳ区で検出した柱抜取穴の列は、基壇上での相対的な位置関係から、二棟の建物のうち北側にあった正堂の南側柱列と考えられる。この正堂は５間×２間の身舎の四面に廂を持つ東西棟建物で、桁行寸法は両端の廂の間13尺（3.9m）、中央間17尺（5.1m）、その他の間は15尺（4.5m）に復原できる。Ⅲ区の北側部分は、東から１間目の梁間筋に当るが、柱



第59図　四王堂基壇と建物の変遷



第60図　四王堂基壇と周辺の調査区検出遺構（１：250）

は溝状の壙を掘ってまとめて抜き取っている。溝状壙はトレンチ西側に延び、非常に危険で掘り下げなかったため、梁間寸法については不明である。

B期　当初の四王堂を撤去し、整地を行うとともに基壇北端から19m以南の基壇を全面にわたって約0.6m程削り取り段を持つ基壇に作り直し、礎石建物に建替える。また、基壇端は瓦と石を用い化粧する。この時期の建物遺構としては、Ⅳ区で礎石と礎石間をつなぐ縁束石と考えられる石列を検出したが、建物構造については定かでない。仮にこの時期も双堂方式の建物とすれば、段をもつ基壇であり、また検出した礎石が想定される建物規模に比し小形であることなどから、東大寺法華堂のように正堂と礼堂とが屋根続きになる形式の建物が想定でき、この礎石列と縁束石列は両堂の軒下となる造合い間に建つ柱を受けたものとも考えられよう。礎石列から復原できる建物は桁行９間で、柱間は両端の廂の間10尺（3.0m)、他の間は13尺（3.9m）等間である。

基壇端化粧には別の場所から運んできたと考えられる火を受けた瓦類が大量に使われており、奈良時代の瓦を主体とするが最も新しい軒瓦でも平安前期におさまり、承和13（846）年に焼亡した講堂にのっていた瓦の可能性もある。また東側基壇端ではＢ期基壇崩壊土の下に焼土・炭層があり、この建物が火災を被ったことが知られるが、灰層およびその下層から10世紀中頃を降らない時期の土器類が出土している。従って、Ｂ期の造営は９世紀中頃に始まり、10世紀中頃に火災で廃絶したものと考えられよう。

C期　Ｂ期に切り取った南辺の段を埋立てるとともに東と西についても基壇を拡幅し、東西40m程の平坦面に造営する。Ｃ期の建物に関連する遺構は検出していないが、現四王堂の軒先付近とその外側一帯に仏事等に使用した土器類を大量に含む層が広がる事から、既にこの時期には、双堂形式ではなく、現四王堂の位置にそれとさほど規模の違わない建物が建っていたものと考えられる。Ｃ期の年代については、Ｂ期基壇土には10世紀中頃以前の遺物しか含まれず、さらにＢ期遺構面には11世紀以降の遺物を含む堆積層が広がることから、上限としては11世紀頃の年代が与えられよう。また『興正菩薩御教誡聴聞集』によれば、11世紀初

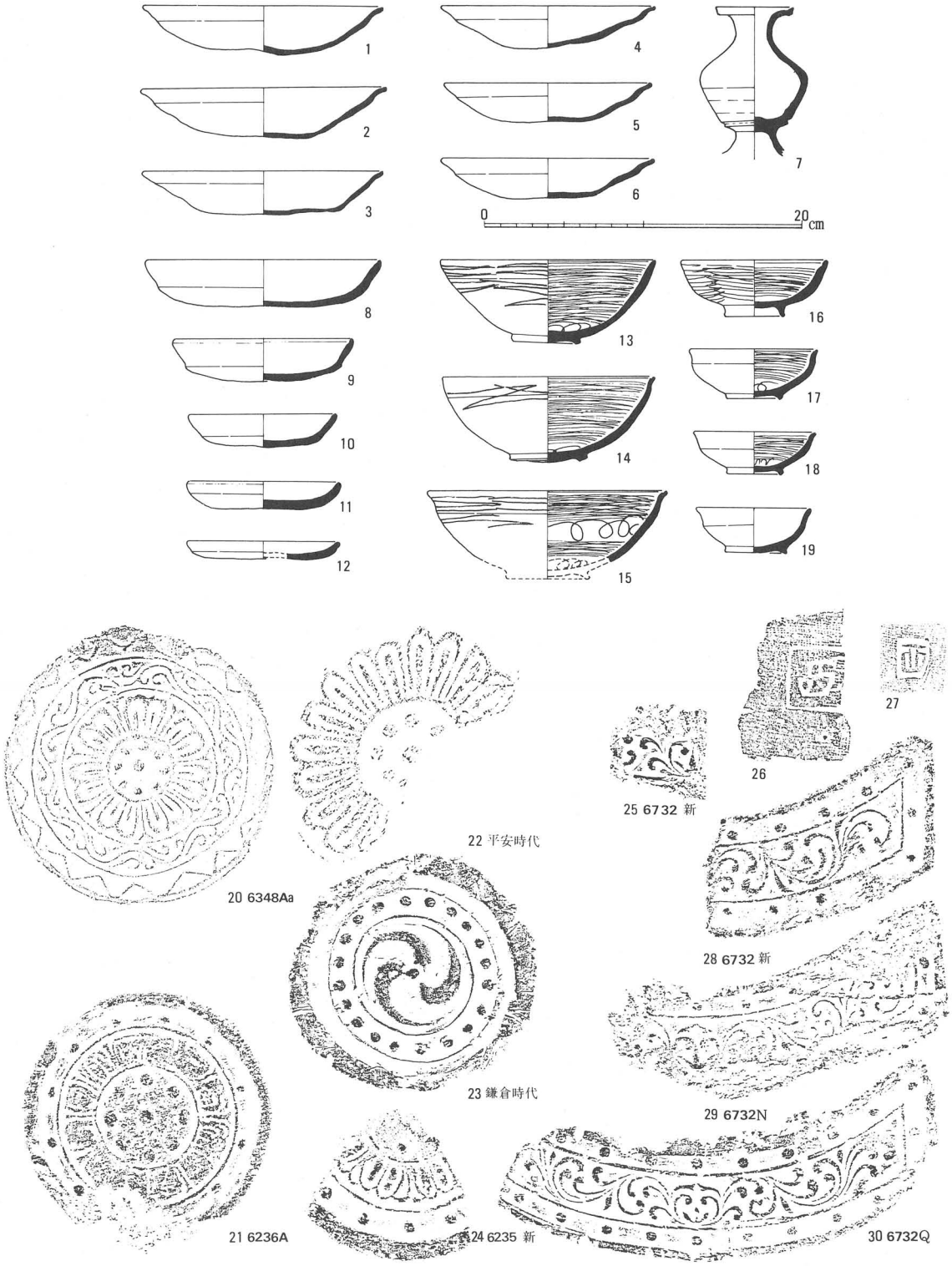
頭の頃、四王堂が露天にうちさらされていたこと、輔静が西大寺の別当に就任した後に四王堂が再建されたことが分る。輔静の別当就任は長保６（1004）年のことであり、調査所見と整合し興味深い。

まとめ

今年度の調査の結果、寺造営以前の右京一条三坊六坪の宅地関連遺構、中世以降の各時期にわたる遺構を検出するとともに、断片的にではあるが初めて、古代の四王堂関連遺構の実体が把握できたことは大きな成果であり、今後の伽藍配置の復原的研究に対しても貴重な資料を提供することになった。また各地区から各時代にわたる多量の遺物が出土し、寺の歴史を考える上にも重要な資料となっている。古代の土器を取りあげると、三彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁等の高級陶器も少量ながら出土しており、往時の寺の繁栄をしのばせるに十分である。瓦類についても、新出型式の西大寺式軒瓦、「西」の刻印をもつ瓦、緑釉塼などをはじめとし、各時期の軒瓦が多量に出土しており、これまであまり明確でかった西大寺の瓦の実体を解明する上で重要な資料となっている。

西大寺四王院関係記事

1　天平宝字８年（764）９月11日　称徳天皇西大寺の建立を発願する（資財帳）。
2　天平神護元年（765）　称徳天皇西大寺を建て金銅四天王像を造る（資財帳、扶桑略記）。
3　西大寺資財帳巻第一　四王院
　檜皮雙堂二宇（各長さ11丈、広さ８丈６尺　蓋頭に竜舌28枚あり）　東南瓦葺房（長さ９丈・広さ４丈）　西南檜皮葺房（長さ９丈・広さ４丈）　東北檜皮葺房（長さ５丈７尺・広さ３丈６尺７分）　次檜皮葺小房（長さ５丈６尺５寸・広さ10丈６尺）　次檜皮小房（長さ５丈６尺５寸・広さ１丈４尺）　檜皮小屋（長さ１丈８尺・広さ１丈１尺）　次檜皮
4　承和13年（846）12月11日　西大寺講堂焼亡す（続日本後紀、日本紀略、旧跡幽考）。
5　延長５年（927）10月　　西大寺五重塔焼く（日本紀略）。
6　長保６年（1004）３月７日　僧仁宗に替えて輔静を西大寺別当に任ず（御堂関白記）。
7　『興正菩薩御教誡聴聞集』（岩波書店版『日本思想大系』15『鎌倉仏教』所収）
　即某当寺に渡りて今は五十年に及び候。即四王はうつき原にて高野笠うち着せまいらせて候しを。薬師寺の威精（輔静のあやまり）すでに講の別当に成たる時。形の如く堂を立しより以来（後略）。
8　保延４年（1138）12月29日　西大寺の造立功により別当済円を権律師に任ず（三会定一記・僧綱補任）
9　嘉禎４年（1238）８月25日　西大寺四王宝前に最勝王経を転読する（西大寺文書）
10　文亀２年（1502）５月８日　兵火により西大寺一山焼亡し四王堂中門石塔院地蔵院東大門のみ焼け残る（大乗院雑事記・実隆記・伽藍炎上略記）。
11　延宝２年（1674）　西大寺観音堂（四王堂）を建つ（旧跡幽考）。
12　正徳元年（1711）　西大寺四王堂を再建す（棟札）。



第61図　西大寺境内出土土器・瓦（1：4）1～7　SE07，8～19　四王堂B期基壇埋土，
22　四王堂B期瓦積基壇，23　SG04